

### 3. 全体討論



金井：後半の全体討論を開始したいと思います。これまで毎回、グループディスカッションやそれを踏まえた参加者全員での意見交流の時間を取らせて頂きました。今回も同様で、何かしら皆さんにご発言を頂きたいと思います。

議論の内容については、特に決めていないのですが、資料にいくつかメモを書かせて頂きました。これは、これまでの3回の連絡協議会でどんなことが議論になっていたのか、そしてそこでどんな知見が得られたのかを簡単にまとめさせて頂いたものです。議論のきっかけになればと思ひまして、まずはこれを私から簡単に説明させて頂きたいと思ひます。

一つめの議論として、第2回、第3回のパネルディスカッションでテーマにもなりましたが、「地域と連携した実践的な防災教育」の重要性を議論しました。その中で出てきたのが、「学校でやるだけじゃ限界があるから、地域を巻き込まないといけない」ではなく、「学校の防災教育に地域を巻き込むということによって、もっといい効果がいっぱい出てくる」という視点でした。片田先生が冒頭のご挨拶で申し上げていた通り、「子どもを育む環境として、地域の防災力の高まりは必要不可欠」であり、そう考えると、地域の防災は、学校と一緒にまわしていくことが重要だという内容が、第3回の黒潮町でもあったかと思ひます。そして、地域の防

災力は学校と連携することによって、さらに強化されるということが知見として出てきたかと思ひます。

次に二つ目の議論として、「逃げる逃げる」教育はいけないという話は何度も出てきていました。実際に何かあったときにちゃんと逃げてもらわなきゃ困る。ではどうしたらちゃんと逃げる子どもになるのかということで、子どもの心の中に葛藤を生むような授業を考えてみたりとか、災害への授業時に我がこと感を高めるためにはどうしたらいいのかを考えたりするなかで、「防災教育を行ううえで求められるコミュニケーション」について議論もしました。第2回では、田辺市の太田先生が実際に行った授業のビデオを見て頂きながら、「どんな発問が、子どもたちにいざって時を想像させて、いざというに行動しようと思う心を育むのか」などを議論して頂いたかと思ひます。

また、先ほどの林先生のご発表の中にもありましたが、そのよううまい授業を作ることも大事だけど、結局最後は「教える側の熱意・真剣さ・真面目さ」というのが一番重要だという話も出てきたかと思ひます。そして、「防災教育に前向きな先生ばかりじゃない」という課題。学校が変われば環境も変わる。子どもは学校も教員も選べません。そのため、どうやって教員のやる気を形成させていくのかも大事だという

話も出てきていました。この点については、具体的に今困っている木下先生からご発表がありました。そんななかでどうやって防災教育をすすめていくのか。林先生の発表の中にもありましたが、次の一步を進めるを進めるためにどうしたらいいのという議論も必要かなと思っております。

それから、三つ目の議論として、防災教育の効果がありました。能登の小木中学校のように、子どもたちの姿勢が変わり、それによって学力が上がったという、防災教育をやることによって他の教育効果が出てきたという事例もいくつか出てきました。そのなかで、「目に見える学力」と計測することはできないけど、子どもたちの普段の生活・姿勢から見える、「目に見えない学力」の向上まで含めて、いろいろな効果があるんじゃないか。それから、防災教育を通じて、何をやるにも一生懸命になる、意欲の向上というのがあるんじゃないかということもありました。

以上のような議論が、これまで3回の防災教育推進連絡協議会においてなされてきました。

そして、今回は、もう一点、どこかで時間をとって議論しておかなきゃいけないが、今後に向けてという点です。冒頭の片田先生のご挨拶にもありましたが、今回で、群馬大学から全体にお声掛けして、定期的集まって頂くという形での開催は閉めることとなります。そのため、この繋がりを持続していくために、何かご意見があったら伺いたいと思っております。

ということで、ここからは全体討論にしたいと思っております。今回ご発表頂いたのは、森本先生から岩手県の課題、二つ目、三つ目は、田辺の新庄中学校、それから黒潮の大方中学校で、それぞれ具体的にどんな実践をされているかというお話を頂きました。そのなかで、宮川先生からは、総合学習等を使った防災教育の進め方について、皆さんとディスカッションしたいというお話を頂いていました。まずは、そのへんからお話をしていきたいと思っております。



小川 正 (輪島市立鳳至小学校)

宮川：総合学習というよりも、これまで防災教育を点でやっていたという形がありましたので、それを線の形にして、スパイラルじゃないですけど、自分たちで課題を見つけ出して、その課題を調査して、そのことについて考えるという形を、1年生から2年生、3年生までの繋がりを持たせたい。

先ほど小川先生から、防災教育を通して自分の生き方を考えるということで、能登中学校の資料を頂きました。こういう情報を共有できたら、自分たちのやっていることにプラスしていけるし、情報交換することで新たな繋がりもできます。今後、こういう機会がなくなったとしても、例えばメールなどで共有して繋がりを持っていけばいいんじゃないかなと思って提案させていただきました。

小川：3月に退職しまして、初任者の研修の指導員として、市内の3校を回っています。

宮川先生にお渡しした資料は、能登中学校に赴任しています廣澤（前小木中学校）が、これから先、防災教育を続けていくときにどうしたらいいんだろうか、道徳とかいろんなものを組み合わせでできないかということで、総合の時間をうまく利用しながら、道徳などいろんなものをクロスカリキュラムとして『生き方科』という形で立ち上げたものです。詳しくは能登町立能登中学校の廣澤に問い合わせして頂ければわかると思います。これは、防災というキーワード

ードを外さないけど、防災だけを新たにするのではなく、今までやってきたものを組み合わせ、そしていろんなものを繋ぎ合わせ、『生き方科』というネーミングでまとめ上げたということです。実際にスタートしているその様子を見ましたら、今までやってきたことを繋いでいって整理してまとめたものなので、他の先生方には非常にハードルは低く、うまくまわり出しているとのことでした。

片田：廣澤先生が能登中学校へ移られて、道徳教育や人権教育や総合学習、それから郷土の教育、いろんなものを全部含めて、『生き方科』という名前の教科にしたわけです。第1回目の授業は私が担当して、生徒の前で話をしてきました。

これまで防災教育をやってきて、防災教育の守備範囲の広さ、影響の及ぶ教育項目のメニューの多さに、先生方も既に気付いておられると思うんですね。そして、それを全部まとめて考えると、「どう生きるか」を考えているようにも思うんですね。

親子の関係の中で、親が子をどう思っているのか。いつもは言わずもがなで受け取っている、ときには「もう、うざい」と言って拒否するようなその思いを受けている。それを防災を通じて、改めて考える。親の立場から考えるならば、自分の命を絶つてでも助けにきてくれるほどの思いに気づく。それこそいつもは「うざい」と思っている親の思いを、防災を通じて、考えてみると、本当にありがたいものだということ再認識できる。

また、おじいちゃん、おばあちゃんなどの弱者に対する配慮の心が育まれる。それから、津波の記念碑一つをとってみても、そこから先人の後世に対する思いであったり、地域に対する思いであったり、地域のことを思う心に触れることができる。

防災は、まさに『生き方科』という名前がふさわしいんじゃないかなとも思えてくるわけです。そのカリキュラムの中身は、先ほど小川先

生からご説明もあったように、原案は大句校長のおられる小木中学校でやってきたことです。こう言ってしまうと失礼ですけども、要するに『生き方科』とラベリングを貼って、並べただけです。要は何か無理をして新しいカリキュラムを組んでいるわけでも何でもありません。総合学習を生き方科という名前にして道徳の内容だとか、郷土の教育だとか人権教育だとか、それらを全部繋げて入れている。非常に無理なくやっておられるなという感じがしております。今の取り組みを見せて頂いた時に、上手だなと正直思いました。本当は、今日ここでご本人の廣澤先生から説明をして頂くと良かったと思うんですけども、参考になるかなと思い、補足させていただきました。

先生方、それぞれの地域の災害の問題に応じた防災教育を行っていますよね。そして、それからちゃんと逃げるといって子どもを育むということではできていると思います。でも、それだけではなく、地域・郷土の教育であったり、人権教育であったり、命の教育であったり、家庭の親子の問題であったり、全部包含していったら、ちゃんと自分の命を守れることができるんだということに繋がっていく、非常に良い取り組みというか、まとめ方だと思いました。せっかくなので、『生き方科』の資料は、廣澤先生に許可を得たうえで、大学から皆さんにお送りしたいと思います。

金井：先ほどの林先生も同じですね。今やっていることを安全教育という大きなくりの中にも位置づけて、資格検定みたいにしようと考えておられる。他に似たようなことをやっているとか、今こんなことやろうとしているみたいなご意見があったら、ご発言を頂きたいです。

大句：廣澤先生が小木中学校にいたときには、最初からたくさん実践をし、子どもたちのつづきも上手に拾い、それを活動に広げていってました。ですから、計画をした通りの総合的な

学習の順番ではなかったです。始めは廣澤先生の自分のクラスだけでした。それが自分のクラスの生徒が3年になりますと、「3年生からの提案です」ということで、学校全体できる形にしていきました。その後、小木中学校でもカリキュラムができて、1年生では高齢者と触れ合い、高齢者の方に自分を覚えて頂き、「小木中では防災活動をやっているの、次の避難訓練には絶対参加して下さいね」と呼び掛ける。

2年生は、山間部の柳田中学校というところと交流し、「山と海で助け合いましょう」「何かあったらお互いに助け合いましょう」ということで、共に小木の祭りを体験してもらおう。3年生になりましたら保育園と小学校との交流ということで、自分たちが作った防災体操や防災カルタを持ち込んで、家庭科の授業で交流をしている。ここ2年間はこれをずっと継続しています。

そして、地区の防災訓練を仕切るのが、中学生と小学校高学年です。少人数なので全体で話し合い、どんな避難訓練にするか、町の人にどう呼び掛けるか、どんな役割をするかを相談します。子どもたちは各学年でもやるし、縦割りで係活動もします。

また、させられるばかりじゃ駄目で、「なんでこれをするのか」を防災集会で、3年生が教えたり、わからなかったら1年生から聞くこともあります。意識を育てるために、集会は年3回位持っています。昨年度卒業していった子どもたちが、最後の防災集会在、自分たちができなかった「夜の避難訓練」を来年度是非実施して欲しいと言い残してきました。すると、次の学年の子らが生徒会に立候補する時、それしかないのかって逆に思いましたが、全員が「先輩ができなかった夜の避難訓練をします」というマニフェストを提案していました。

片田：今の大句先生のお話を伺っていると、一つの学校で防災、防災、防災、防災、防災で、なんかこういっぱいですね。例えば、これだけのメニューを先生方が各学校に持ち帰って、校長



大句 わか子（能登町立小木中学校）

に言うと「何だ、防災ばかりだな」みたいな話になっちゃうと思うんですね。でも、防災とラベリングしているものだから防災ばかりみたいなんだけど、その話の中身は全然違いますよね。

だから、先ほどの『生き方科』という名前にカモフラージュするのは良い考えだと思います。もう『防災』ってあまり使いたくないじゃないですか。『防災』というと「逃げろ逃げろ」と、そこばかりのイメージみたいになっちゃうんだけど、これを通じてやっていることは子どもたちの人間形成であり、まさしく教育そのものなわけです。だから、『防災教育』という言葉のイメージの狭さ、これを何とか打破していきたいという思いが非常に強いものですから、そういう面でも『生き方科』というのは、一つのラベリングとしていいなというふうに思っているんですね。

それから、今の小木中学校の取り組みのなかで、いいなと思っているポイントがあります。これは東京都の荒川区の全中学校でやっていることなんですけども、実は中学校の中に自主防災会があります。それは、学校の中のクラブ活動でも何でもありません。地区にはそれぞれ自主防がありますよね。それと同じようなものが中学校の中にあります。これは、学校は表面上関係ないです。もちろん、フォローは学校でやっていますけども、中学校の自主防災会の会長さんは、自主防災会連合会の会長さんとは直接や



り取りをします。「何月何日に避難訓練がある」とか、「中学校の自主防災はこういう役割を担ってくれ」とか、「その日は試験期間中だから駄目」みたいな交渉も学校の自主防災会がやっている。

学校の中でどれだけ先生方が子どものことを褒めようと、できレースなんですね。逆にどんなに子どもたちが学校の中でしくじろうと、最後先生が尻拭いしてくれるんですよ。学校の先生方のお褒めだとかお叱りではなく、直接子どもたちが外とやり取りして、あてにされ、そのことで責任を果たし、そしてそれを喜んでもらう。このような地域との繋がりが重要なんです。もちろん先生方のお膳立ても必要にはなるんですけども。だけど表面上は、地域にあてにしてもらうという関係を、どう作っていくのかというのは、一つ大きなポイントだと思いますし、小木中学校はそれがうまくできていると思うんですね。ある部分は設計してそうしたし、ある部分は自然発生的にそうなったところもあると思いますが、子どもたちを年寄たちが本当に目を細めて喜んでくれて、子どもたちがそれを喜びに感じ、子どもたちが自ら動いていく。地域との連携というのが非常にうまくできているところに、あれだけの成果をおさめている要因があるんじゃないかなと思いますね。

栗林：教育委員会で社会教師の指導員をしている栗林といいます。退職して4年目になります。

牟岐町は、海の町です。本当に課題があります。「防災をやらなきゃいけない」と、いろんな避難訓練であったり、授業のあり方であったり、私自身もご協力に行ったり、紹介させて頂いているんですが、まだまだ足りなかったなど。年間を通して、各教科、無理なく系統付けるということが必要だと実感しています。

ここで、私がやっていることを紹介させていただきます。小中一貫教育のコーディネーターやっています。学校と地域を繋いでいる。地域の中で、地域を作っていくコーディネーター。教育委員会のコーディネーター。防災をしていく



栗林 啓次（牟岐町教育委員会）

えで、学校と地域の連携があるので、教育委員会等も後押ししている。今、子どもたちが学校を離れて、地域を学び合いつくる学習を地域スクールでやっています。子どもたちが自分の意思で、自分の考えでやってみたいことをやっています。目的は何かと言ったら、コミュニケーション力です。これを育てるにあたって、主体性・協調性を高め、自らすぐ考えて、仲間と一緒に共同して作り上げていく、そういう力を育むために、『シラタマ活動』をやっています。

『シラタマ活動』は、中学生が中心になって、町の問題解決です。牟岐町は、防災や過疎の問題がありますが、人との非常に希薄です。人と人、子どもと大人、家族のような関係を作ろうとする活動です。そのために、自分たちでやりたいことを考えて活動しています。昨年の夏のシラタマでは、牟岐の魅力発表会をしました。子どもたちは、牟岐の魅力について調べる。海あり、山あり、川ありで、自然環境が素晴らしい。でも、誇れるというところまでいかない。そこで子どもたちが、海・山・川に精通している人たちに、いろいろ聞き取り調査して、自分たちが感じた牟岐の良さを伝える。でも、それだけでなく、美味しいものをいっぱい食べているけれども、課題というところで、災害に子どもが気付かせてくように繋げていくようにとやります。

今年は8月28日に、中学生が中心になって夏のシラタマを行います。中学生が28名、小

学生が9名です。38名が企画運営します。ここに保育園の子からお年寄りまで幅広い地域の方80名が参加して、人と人との関係を作っていきます。100名あまりが一緒になって、活動を通して学びます。しかし、まだ防災がテーマになってないんです。私が仕掛けているのは、人と人とを繋ぐ、あるいは地域を連携する。でも子どもたちの中で、やっぱり防災っていうことにテーマとして、やってみたいという気持ちを持っています。

そのためのきっかけとして、夏休みにシラタマの中学3年生4人が、東北の被災地を訪れます。被災地の小学校を見たり、あるいは被災地の地域の方々のお話を聞いてきます。そして、子どもたちが牟岐に帰る時に、「学校の仲間や地域の方々に、自分たちが見たもの、聞いたこと、これから牟岐で自分たちがやらなければならないことを伝えたい」となってくれば、シラタマ活動のリーダーとして、地域を巻き込んでやっている今の活動が、防災へと繋がっていくのではないかと期待しています。

山本：黒潮町の拳ノ川小学校の山本です。3、4年生の複式の担任をしています。

栗林先生が仰った小学校の実践も含めてですが、黒潮町では本年度全小中学校で「地域に打って出る」というか「地域との関わりを作っていく」ことが、防災教育の取組の中の大きな柱になっています。というのは、教育行政や行政がいくら働きかけても、34.4mの黒潮町でさえ、「津波が来た時には仕方がないな」というような人たちもいます。だけど、昨年、防災シンポジウムをやった時に、田ノ口小学校の子どもたちの声を聞いたら、「これは何とかやっぱり逃げるようにしなきゃいけない」となりました。

もともと黒潮町の中では、20年後の自分たちの故郷を支えていくのは我々ではない。この子どもたちが、20年後、30年後、自分たちの故郷に住まいながら、そこで自分たちの故郷を、ひいては高知県が日本という国を作っていくてもら



山本 明彦（黒潮町立拳ノ川小学校）

いたい。だから、地域の人たちに打って出ていく練習ではないですけど、そういう関わりを今年は作っていかうということです。自分も3、4年生のたった4人の学級ですが、地域のお年寄りのところに防災の紙芝居を作って発表してきました。総合的な学習も、自分の学校は並列型。先ほどの田ノ口小学校は1年間通しての継続型で防災を取り入れていましたが、私のところは並列型で、一つの柱が防災教育です。とにかく子どもたちの主体性を育てたい。新学習指導要領がやがて交付されていくなかで、新しい資質、その能力の中で、人とどう関わっていくか、社会とどう関わって、世界とどう関わっていける人材を育てていくのかという部分があります。

子どもたちが紙芝居を通じて、おじいちゃん、おばあちゃんたちに訴えたら、「あなたたちが言うんだったら、やらなきゃいけないね」ということで家具の固定をしようと言ってくれた。けど、本当に家具の固定をしてないのかわからないので、アンケートを取ろうとなった。何千軒とあるような大きな地域じゃないので、50軒くらいアンケートを取って、3、4年生ですがそれを集計して、2学期に発表する。では、「どんな形で発表しようか」と聞いたら、「おじいちゃん、おばあちゃんが見てもわかるようにしたい」「丸いグラフでやったら見てよくわかる」と言うので、円グラフは5年生の算数で習うんですけど、1学期のうちに電卓を使ってですが、割合の求め方も教えて、円グラフを作って下書

きました。2 学期にはそれを使って発表する予定にしています。そんな発想を子どもたちは主体的に生み出していきました。

先ほど、能登中学校であったように、道徳、人権、総合だけでなく、算数科とかいろいろなものを組み合わせていく。もともと総合的な学習は、自分で課題を見つけて、様々な知識、技能を駆使して学習するものでした。防災教育は、そういう総合的な力を本当に育てていくもんだなと思っています。「やって良かった」という実感と、一つがネックになってきているのが、木下先生も仰ってたように、継続するためには、やっぱり確立していくとか、作り上げていかないと、なかなか難しいと思っていますところです。

そこで、黒潮町は、学校現場と教育行政、特に行政とがタイアップしているところは、大きな強みだと思います。地域の人が行政の言うことを聞かなくても、子どもたちが間に入ることによって地域も変わっていく。その力が教育にはあるということで、教育行政と学校、ひいては保・小・中・高・大までのネットワーク作りにもつながる。

先ほど宮川先生も言ったように、今だったらネット社会って言われるように、今後のこの会の継続もいろんな方法が取れるので、それぞれの実践を自分たちでホームページなどにアップして、いつでもそこにアクセスできるようにする。当面は群馬大学のほうで窓口としてお世話になると思いますが、また日本全国に広がっていくようなネットワーク作りと、行政とのタイアップによって、継続性が計れるんじゃないかと考えています。

金井：山本先生にお話頂いたのは、昨年末に黒潮町で第3回目をやった時に、畦地さんが「黒潮町の最大の課題は、地域と学校の連携」だという話をされていたので、それを踏まえて次に進んでいるんだなと感じました。

木下先生のご発表の中にもありましたが、一教員でゼロから実践を始めるのは難しい。栗林



嶮口 善一（田辺市教育委員会）

先生も「カリキュラムとかマニュアルがないとできない」という話をされていました。そういう意味では、黒潮町、田辺市、新宮市、尾鷲市には、手引きやマニュアル、授業案が作られている。これらは、「何かやらなきゃいけない」となった時には、それを見れば、授業をすることができるという点では、便利かもしれない。しかし、今まで議論してきたことには、今まで作成されてきた手引きでは結びつかないような気がします。黒潮町がうまくいっているのは、お節介なほど教育委員会から各学校への関与があったからだと思うんですね。手引きを作って、次のステップに進むために、どうしましょう。

嶮口：田辺市は昨年末に手引きを作成しました。担その作成にあたり、教育委員会として防災教育担当者会を立ち上げたことによって、教師と教師はある程度繋がったかもしれないなと思っています。次、どのステージ上がるのか。

例えば、先ほどの新庄中学の防災未来学校。あれは子どもと子どもを繋ぐことになると思うんですね。自分のことを話すると、うちの娘が防災未来学校に出るんです。私からすすめたわけではないんですよ。ある時、娘が「行きたいんだ」と言ってきたんです。「何で」と聞いたら、3月に子どもたちを集めて発表会をしたんですが、それに友だちが参加したらしくて、「あれは絶対いいと言っていた」「〇〇ちゃんがいいと言っているから、ここは絶対いいと私も思う

から行ってみたい」と言ったんです。これは、企画の勝ちだと思うんですね。体験の中で頭に一番残りにくいのが、「話を聞くだけ」と言われています。子どもと子どもを繋ぐことで、初めて会った子どもたちが、新しい課題、答えが一つではない課題に対して、いろいろ話し合う経験をする。そして、それを自校へ帰って友だちに伝える。『教える』というプロセスが、一番記憶に残ると言われていると思います。そういう意味では、新庄中学校の実践は大変素晴らしいと思います。

今後考えられることとして、担当者会として、子どもと子どもをどう繋ぐかという視点で考えていこうかなと思います。

榎谷：嶮口先生の娘さんの話が出ましたけども、私の学校の生徒です。昨日、「こんなことをやるんだよ」と教えておきましたので、多分立派な発表をしてくれると思います。

私も田辺市の防災担当者会のメンバーなんですけども、手引き3年間かけて作りました。それで、先日、担当者会がありまして、1学期にどう取り組んだのかについて話し合いがあったんです。担当者会は、12月、3月にもあるんですが、そこでまた同じことをするのは、手引きを作った意味ないなと思っていたんです。何か他にあるんじゃないかと。それで、たまたま新庄中学校の谷本先生が、今年は防災未来会議をやることになった。そこにうちの生徒も参加するんですけども、「来年はあるの」と聞いたら、「ありません」と。せっかく始めてくれたんだし、来年もやらなきゃいけないんじゃないか。「来年は担当者会が主催でやったらどうですか」という話を嶮口先生にしたんです。泊まりだと負担も多いので、日帰りでもいい。教育委員会が表に出てやるのは難しいと思うので、担当者会で一回やってみませんかという話はしたんです。子どもの交流を進めるのは子どもたちがとても喜ぶんです。



榎谷 節生 (田辺市立大塔中学校)



福田 哲也 (新宮市教育委員会)

金井：新宮市はどうでしょう。去年、「地域との連携していかなくゃいけない」と言って、三輪崎地区では、中学校が中心となって防災の活動をしているという話があったかと思いますが。

福田：本年度は、新宮市も中学校の生徒を集めて、交流しようというのは、企画はしているところです。

ちょっと話が違って申し訳ないんですけども、8月3日から5日まで、近畿ブロックの道徳の指導者養成研修に行かせてもらいました。道徳の教科化ということで、年間35時間の授業をしなければならない。中学校でいうと22項目の内容を授業しなきゃいけない。残り13項目は各学校の重点項目になる。この重点目標の中に、防災を取り入れていけないだろうか。

例えば和歌山県であつたら、濱口梧陵の話が題材としてあるので、そういうのを入れて、自



分の命であったり、人との関わり、集団、生命であったりを取り上げる。どう繋げるかっていうところについては、これまでのいろんな取組を参考にできるのかなと思うんです。

このようにこれから変わっていくものの中に、組み込んでしまうは一つの手かなと。木下先生の発表もありましたけれども、既存の取組の中に新たに何か入れることは難しいと思うので、新たに始まる時にそこに組み込んでいくというのは、一つの手かなと感じます。

情報教育、安全教育、国際理解教育、人権教育などいろんな教育課題がある中で、全てをやらなければならないというのは大変なことなので、防災を頭に置いて、こういうものをまとめてみるというのは、どこでもこれから取り組んでいけることなのかなと思いました。

木下：いろんな先生方の話をお聞いているなかで思い出したのですが、昨年宮城県から私共の学校に講演に来て頂いた先生に、「鶴見橋中学はEQが高いよね」と言われたのです。EQは心の知能指数。IQにはもしかしたら課題があるかもしれないけど、「EQの数値が非常に高く感じました」と仰って頂きました。そのことについて学んだのですが、心の面は、学力やいろんな課題に取り組むために凄く大事です。先ほど先生方も仰ってたんですけど、「意識を育てる」といったような、「目に見えない」、「形にならない、見えないもの」を育てるような防災教育でないと駄目かなと非常に感じております。そういう人を大切にするとか、思いやりの心を持つとか。そういうのは学力だけでは補えないと思います。今、大阪市の学校は学力について非常に取り組んでいるのですが、それも大事なことです。その土台として、そういうものがあるかないかで、子どもたちが変わっていくのではないかなと思っています。

ただ逆に考えますと、形には見えないので、どうしても結果がわかりにくい。そんなことを言っている、入試が不合格だったら親御さん



五十嵐一浩 (魚沼市立湯之谷中学校)

も悲しみますし、学校としてもそれは結果が出てないことになる。

今もちょっと悩んでいるのですが、目に見える結果という形にすれば、もしかしたら防災教育ももっと発展するのではないかな。鶴見橋中学校のように「子どもたちを見てください」と言えたらいいのですが、今何もない学校に行った時に、「防災教育って、こんないいことあるんですよ」と口では伝えられるのですが、合格とか点数みたいな感じで、何かの形と見せることはできないのか。

五十嵐：この3月まで三条市立第四中学校に勤めていまして、この4月からは魚沼というところに異動になりました。三条市ではそれなりに防災教育をやっていたんですが、新しい学校ではほとんどやっていないという状況に自分自身がいます。今の話なんですけど、あまりいっぱい話をすると明日話すことがなくなるので触りだけ。

結論から言うと、はっきりわかっていないんですが、三条の学校で防災教育を始めた頃から、ほぼ同時にNRTの数値がどんどん上がってきたという事実がある。学力が上がるのは、いろんな要素がありまして、例えば最大の要素は、先生方の教育技術。そういう技術の高い先生が来れば学力も上がる。それから、学区内に新しい団地ができて、そこがハイソサエティな団地で、お医者さんの息子さんとか大学教授の娘さんとかが引っ越してくれば上がるんです。

そういうところがいろいろあるなかで、では前の学校がどうだったかという、全く変わらなかったんですね。4年間いましたけども、学区が変わるわけでもない、先生方もほぼ変わらない、やり方も変えてない。そのなかで唯一変わったのが、学校の特色ある教育の一つとして、防災教育を全職員をあげてやるようになったことだけです。それが実践されてから学力が上昇始めて、NRTが50を超えていった。詳しくは明日、改めてお話しします。

明日も言えないんですけど、実は何故上がったかということまで、まだ詰めてないんです。おそらく防災教育をやったことで上がったんだろうけど、防災教育の何が学力を押し上げる要因になったのか。そこを詰めていかないとあまり意味がないかなと思っておりまして、そこは今後詰めようと考えているところです。

大句：同じような事例が、小木中学校でも見られました。なぜ上がったのかと考えると、授業規律がよくなったからではないかと。今の高校3年生の学年が中学校に入学した時は、校長と教頭で新入生を集めて、「中学校の勉強のやり方」を教えたことがありますが、その後はそういうことをすることなく、現在までできております。

一昨日、全国学力学習調査の結果が届きました。今の子どもたちは入学時からちょっと大変でした。人数少ないんですが、不登校も出ました。でもどういうきっかけか出てきて、文化祭でその子を主にすると生き生きと学校に出てきています。今は受験前なので仕方なく、嫌々授業を聞いています。その子どもたちが、小学校6年生の時の、例えば国語のB問題は全国平均からマイナス9.9でした。それが今回の結果では、プラス2.0。これが一番大きな変化ですが、他も全部上がっています。

昨年卒業した子に関しては、小学生のときに小木中学校の生徒から地震のメカニズムなどの出前授業を受けた子たちでした。その子どもたちのときは、石川県よりも能登町の平均が高かった

です。石川県は全国3位なので、全国より高いです。その県よりも能登町は高かったです。その時に、奥能登の19の中学校の中で上から3番目だったんですが、受験前に一斉に全部一緒にテストを受けたら、1番になっていたんです。

それは何故かになっていったら、子どもたちにどれだけ勉強しろと言っても駄目。やはりやる気になった。そういうやる気が起こったのは何故かというのにはよくわかりませんが、授業規律が良くなり、人の話を聞くようになり、「ペアで話をしなさい」と言えば、ペアで話をするようになる。それまでは「ペアでしなさい」と言っても、「相手が悪い」とか言ってやらなかった。そうやってきたのは、人前にでて話をしたりすることを経験したからかもしれません。

谷本先生の発表も出てきましたが、質問紙の中の「地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがありますか」という問の昨年度の全国平均は33%。今年卒業した子どもたちは66%でした。今の3年生の質問紙では、同じ質問がなくなっていて全国との比較はできないんですが、うちの学校で昨年と同じ質問紙もさせてみました。すると2年生まで低かったのに、3年生になったら高くなっていました。それは、縦割り集会をしたりしたからかなと。

摂津市から来て頂いたのをきっかけに、全校集会をしました。その際、子どもたちには、「何を質問されても答えられるようにしなさい」と指示して、地域を調べたりさせました。それで摂津市に方々に子どもたちが説明し、質問の受け答えもしました。3年生は「まだ自覚が足りない」と思った。1、2年生は、「3年生の受け答えが大変立派だったので、来年は僕たちもそうになりたい」と思ったと、アンケートの結果を出していました。

小川：子どもたちが「避難経路を実は町民に説明したい」と。でも「こんな地図だけじゃ年寄衆はわからないだろう」と。それならどうするか。「じゃあ写真で入れよう」。次に、「ビデオを作

ろうよ」と。このような流れで、自分たちが役に立つことに対して、真剣に向き合おうという姿勢に繋がっていったんだと思います。そして、そういう3年生の動きが、順番に2年生、1年生へと繋がっていき、3年生の活動を小学校でやったり、あるいは防災の歌と体操を保育園でやっていく。

そういうことを経験してきた子どもたちが、知らず知らずのうちに、物事に対して真剣に向き合っている。そして、自分たちがやっている活動が、単なる一つの活動じゃなくて、その地区全体に、将来にわたって非常に役に立つんだということを理解すると、さらに前向きに取り組んでいく。そこに真剣さが加わってきますよね。自分たちがやっていることが、「皆のためになっているんだ、役立っているんだ」と思えば。

そういう成功体験を通じて、「自分たちが今一番できることは何か」「中学生が一番今することは何か」と考えたら、「真剣に勉強することだ」と。そこへ少しずつ変わってきたことが、6年程経ってみて、結果として学力が上がってきたことにつながっているんじゃないか。

きっかけは釜石や東北の皆さんから学んで、「今自分たちが生かされているなかで、できることは何なんだ」と、そのことに真剣に向き合って、立ち戻ったところが勉強だった。従って、防災の取組を通じて、子どもたちが地域に行って、「自分たちが皆から大事にされている」ことに気づく。そして、自分たちが主体となって動かないと駄目なんだと。その結果、町会長の何気ない言葉でしたけども、「学校が動いてくれるから、地域がこうやって動いてくれる」と、逆に地域が学校を頼ってくれている。最初はこんなんでいいのかなと思っていたんですけど、逆に今は、地域が学校頼ってくれる。こんなありがたいことはないです。そういうなかで、子どもたちが、真剣にいろんなことに向き合う姿勢ができてきて、結果としてそれが学力に繋がってきているのかなと。離れてみて、そういう感じがしています。



畦地 和也（黒潮町教育委員会）

大句：いろんなことしなければいけないのに、防災もやらなければならない、という発言もありました。確かにそうなんですけど、私の今年の心境は、防災は日常であって、特別変わったことではないと思っています。職員にも「防災しなきゃいけないと思わないでください。防災は日常です。いろんなところに転がっています。」と言っています。それに反応するのは子どもたちで、2年生が教頭に、熊本の地震があった時に「防災の小木って言っているのに、私たちが何もしないわけにはいかない」と言ったので、3年生を飛び越えて、じゃあ募金にいかかという話もできています。

畦地：防災教育をやると学力が上がるということは、僕は正直言って、当たり前だと思っているんです。僕は一般行政職なので、敢えて、ここにいる先生方全員を敵に回す言い方をしますけども、それは何故かという、先生が教えないからですよ。防災教育を教えないんですよ。例えば、板書をして、「いいですか。地震がこう起きるんですよ。その時は皆さん逃げるんですよ。わかりましたか。」って授業してないでしょう。していない先生方がここに多分いっぱい来てらっしゃる。つまり、生徒たちにちゃんと自分で考えて、行動させるためにどうしたらいいのかっていうのは、生徒自身に考えさせる授業じゃないと、防災教育って成り立たないですよ。

次期指導学習要領、中教審の中にもアクティ

ブラーニングというのがはっきり明示をされましたですね。アメリカの博士が実験により、ラーニングピラミッドという学習定着率を算出しています。講義、座学は定着率5%なんです。先生が一生懸命100教えても、5しか定着しないということですね。読書が10%で、視聴覚が20%、デモンストレーションが30%、グループ討議が50%、自ら体験するが75%、人に教えるが90%なんです。ということは、座学よりも人に教える。地域に出て行って、おじいちゃん、おばあちゃんに伝えるということが、18倍も効果があるということなんです。あとは簡単じゃないですかね。

子どもたちの学力が上がるというのは、要はそういう訓練。自ら学習するという定着率が高い訓練ができるのが防災教育だと思うんです。だから、防災教育をやれば学力が上がりますというのは、僕は当たり前だと思っています。

片田：先ほど大句先生の話の中に、摂津市の話が出てきました。摂津市長さんはこういうことに気付かされていて、何とか教育を通じて地域を変えていきたいという思いの中で取り組んでおられる。ところが、摂津の学校は、学力の問題が大きくて、先生方の視点は、学力向上、教師魂はそこに向かっているわけです。

学力向上に大きな関心があるところに、市長の命を受けた教育委員会から「防災教育に取り組み」と指示がでた。しかし、「そんなことやってる暇あるのか」という感じで、反発が起きている、それでもそこに乗り込んでいって僕はやっていました。

はじめは本当にしらじらしい雰囲気の中で、防災教育なんて本当にやる気ないんだけど、「校長に行ってみよう」と言われたからという顔をして皆座っていた。ところがですね、いつもの調子でこうやって話をしながら、少しずつ違ってくるかもしれないなという気付きが始まった。そこで、摂津の先生方に、「小木中学校に行ってみよう」と言ったんです。小木中学校に視察に行

って頂き、現場を見て帰って来た次の会議は、ガラリと先生方変わってましたね。

やはりそこに気付きがあったと思うんです。そして、木下先生も仰った「出会い」とか、そのきっかけ。どれだけ話をしても、なかなか伝わらない部分があるんです。けど、現場に行くと小木の状況を見て来て、子どもたちが堂々と摂津の先生方に説明する。そして、その凛と説明してくれた子どもたちの姿に、摂津の先生方は、防災教育をやっていたら子どもたちの学力の問題も解決できるかもしれないし、自分たちは今まで学力学力って、凄く矮小化した中で物事を考えていたんじゃないか、ということに気付きがあったんだろうと思うんですよね。

今ここでやっているような議論が、摂津市の先生方の中で行われるようになってきました。いずれこの輪の中に摂津市の先生方にも入って頂きたいなと思っているんです。どんどんそういう動きが出てくるといいなと。

畦地さんの話にもありましたけども、防災は教わるんじゃないんですよ。自分で考え自分で解決するために、その道筋を立て、自分で繋がり、自分でやる気を還元し、それを自分の中で更に回していくという、まさに生きる力に繋がっていくような気がするんですね。多分この集団は気付いているんですよ。これをどう広げていくのか。なくじゃなくて、これをどう形式化していくのか、広められるような状況に持っていくのかは、まだまだ研究を要するところだとは思いますが。

五十嵐：さっきほど、「学力が上がりました」という話をしたんですけど、防災教育は学力を上げる学習だと理解しているわけではないんですね。防災教育には、命は自分で守ることを皆に強制していく。本来あるべき姿を育てていくのが防災教育ですので、学力が上がっているから防災教育をやらなくてもいいということでもない。

私が「学力が上がっています」と言ったのは、実は防災教育のポテンシャルって非常に高く、



いろんなものを包括している。先ほど片田先生が仰いましたけども、いろんな教育を全て包括している。おそらく、たった一つの教育じゃないか。それをしっかりやっていくことで、様々な波及的な効果が生まれてきて、その一つが学力だと説明したんですね。

片田：議論が広がっていますがけども、やっぱり釜石でやってきた教育に端を発して、これだけの議論ができるようになったんだろうと思うんですね。第1回は釜石に行きました。あの現場を見て、子どもたちの様子を拝見したから、議論がここにいきついている。この状況をどのようにご覧になっているのでしょうか。

沖：釜石小学校の沖です。震災当時は、釜石東中学校の隣の鶴住居小学校に勤めておりました。学力向上についてはよくわからないんですが、一言えるのは、子どもたちは「伝えたい」という思いを凄く持っているんだなと感じます。

隣町なんですけど、大槌町というところがあって、そこは町長さんも亡くなっています。そして、たくさん方が亡くなった町役場を解体するかしないかが論議になっていて、解体の方向で話が進んだときに、高校生が「将来の防災教育のために何とか残してくれませんか」という嘆願書を出したんです。

震災が発生した年の次年度、私は6年生を担当したんですが、引き渡した後に亡くなってしまった子が一人いる学年でした。その年の学習発表会で何をやるか考えていたときです。普段の学習発表会だと劇を選考するんですけど、そのとき、鶴住居小学校は二つの学校に分かれ間借りしていたので、劇はできないから、歌を歌ったり音読したりとか、そういったのを地域の人に見せて、元気なってもらおうということになりました。しかし、私は震災のことについてやってみたらどうかなと思った。ただそういう学年だったので、「先生は震災のことについて発表したらどうかなと思っているんだけど、無



沖 拓（釜石市立釜石小学校）

理はしなくていい。自分たちで決めていい。やりたくなかったらやらない。無理はさせないから。自分たちで決めて。」と言ったら、「やりたい」と子どもたちが言って、感謝の気持ちとか、避難することの大切さとか、そういったのをそれぞれのグループで考えたのをまとめて発表したというのがありました。

これから釜石でも、被災を経験していない子どもたちが入学してくるので、どうしていこうかと悩んでいるところなんですけど、「伝えたいという思い」をいかして、子どもたちが町作りにどんどん参加していけないかと思っています。町を再生できるチャンスはなかなかないと思うので、そこに关わるような関係を学校が作ってあげれば、地域とも関わっていけるし、子どもたちもいかしていけるんじゃないかと思っています。

森本：明日、話題にしたいと思っているんですが、震災から5年経って、当時の中学生に今取材を始めています。きちっと一回整理する必要があるんじゃないかと。改めて、防災の学習に取り組むことの意義を子どもたちから徐々に学んでいます。これからどうあるべきかにも繋がっていくんじゃないかと思っています。

防災教育をどうやって学校の俎上にのせていくのか、県の教育委員会にいて、思うようにいかなかったです。本当にジレンマです。この「全県でやる」なんてことは大変です。被災地の学校からは、「また新しいことやらせるのか」

と言われる。防災は危機に備えるということですよ。危機に備えるっていうことは、やっぱり日常どれだけ豊かにできるかっていうことに繋がるんだと思う。それを多くの先生、岩手の全ての学校や先生にどういうふうに展開すればいいかを考えていければ。

教育行政は教育行政で役割と責任もあるよなと、非常に考えさせられたところです。防災は総合学力なんですよ。命に関わるところなので、今、文科省でも、切実感のある課題にぶつかることが学力に結びつくっていう議論になっております。そこの俎上にうまく載せていければ、もっと全国で展開できるんじゃないか。

全県人事異動ですので、釜石も現状としてどんどん先生方が入れ替わっています。先日も担当者会議に呼ばれて行ったときに、「釜石に来たら『命の教育』。県に行けば『復興教育・防災教育』。あれもこれもやらなきゃいけないんですか。」って言われた。「違いますよ」というところから、もう一回やらなきゃいけない。釜石でもそこからやらなきゃいけない。もう一回何か作り上げなきゃいけないのかというのを非常に感じております。

片田：一緒にまとめなきゃいけないところがあると思うんです。今お感じになっていることと今日の議論なんかを踏まえて、ちゃんとした形で世に公表してですね。広められるようにまとめ上げる作業をまた一緒にやりましょう。

小川：自分は今、新任の先生方を4名教えています。彼らはこれだけ映像が残っている東日本のあの津波の状況とか、被災している状況をほとんど見ていない。そういう映像は頭に残っていて、あの中から何か教訓で学ばなきゃいけないと思っているもんだと思っていたんだけど、今新任の先生方にあの映像を見せてあげたら、「こんなだったんですか」というのがほどんどなんです。その一方で、片田先生が実施したNHKの震災ミライ学校の授業風景を見せたら、「是非

これをやりたい」と言って、授業を実践してくれた先生がいました。

これは自分の上司が言ったことですが、「お前は教員、最後校長として現場に出るけども、東日本のあの人たちから何を学ぶんだ」「教育はどれだけの人たちの思いに寄り添うことができるんだ」と。こう言われた時のことをもう一回考えて、実際何が起きていて、どういう状況になって、そのなかで子どもたちがどうなっているか。それを考えるきっかけが必要。若い先生たちが、震災ミライ学校の釜石小学校の児童の映像を見て、「私、これやります」と言って、片田先生がやったあの授業風景をそのまま自分で実践してくれました。ですから、若い先生方に、そういう映像を見せて、きっかけを与えていくだけでも違ってくるだろうと。

それから、和歌山県は初任者研修で、防災の研修講座を何時間かきちんと設定してやっていますよね。初任の先生方が、そういういったものを学ぶ機会を体系化してやっていくことができなかなと。先生になる若い世代の人達が、教壇に立つ時には、既に防災の視点を持っているようにする。今まさに復興の過程にある。経験した世代が今いる。今でないとその熱いものが伝わっていかないので、それを大学のカリキュラム等にしっかりとまとめる。各地区の初任者の先生も含めて、あの悲惨な状況の映像を見ることが、「なんで防災なの」という原点になるのではないかと思います。教員になる若い世代に対して、研修などを設けてもらえれば、引き継ぐきっかけになるんじゃないかな。

森本：岩手県も先生方の研修はいろいろやってはいたんです。体育館で泊まりの初任者研修をやりました。最初、村上洋子先生の講演をやって、その後私も県教育委員会として、学校安全、学校防災の必要性をお話して、避難所運営をやって、カリキュラムを作ったんです。一日の中で。そうしたら、年間を通していろんな職員研修があるんですけども、最も点数が高かった。

それだけ若い先生に響いた。その時に確認したら、大学で全ての教職員が全く防災をほとんどやってきていないという状況でした。

岩手大学は、被災経験のある大学として、教育学部がある大学として、このままじゃ駄目なんじゃないかと。きちっと全部の学生が防災を学べるようにしないとイケないという話を学部長にしたら、「考えるから」ということで変えて頂いた。こういった議論を踏まえて、教員養成カリキュラムを作れたらなと思っています。

片田：教育学部の先生と僕らのような防災を専門にしている者との間には意識の差があります。教育学部は教員養成の中でなかなか難しいです。だけど、教員養成の中に必要だなというのは思います。特に地学教育もなくなってしまって、自然を学ぶことが少ないですね。だから、災害大国日本にあって、僕は防災という科目を文科省では提案したんですよね。地学教育、絆教育、そして命の大切さ、これらを防災という名前でラベリングして、ちゃんと科目化すべきなんじゃないのかということ提案したんですけども、なかなか意識の差が大きいなと思います。

山本：新宮市の神倉小学校の山本です。連絡推進協議会に参加しているメンバーは、これだけの討論をするので、どんどん意識が高くなっていきます。初めは「逃げなくちゃいけない」という防災教育から、それこそ防災教育をすることで学力も上がっていくのではないかとこのところまで論議するようになった。このメンバーはそこまで達することができていますが、僕ら以外の先生方が同じようになってくれるためには、僕らが時間をかけてここまできたのと同じように必要な時間があるのではないかと思うんです。新宮市のワーキング会議もいつも同メンバーで同じ議論をしている状況です。

今年、学校を変ったのですが、学校を変えると、やっぱり防災教育に対する意識には温度差あるなと感じます。初任者研修で防災の教育



山本 健一（新宮市立神倉小学校）

をするっていうのも一つだと思うのですが、どれだけ映像に触れるか、こういう討論の場にどれほど自分の身を置くかとか、そういう機会に触れるかがとても大事になる。どうすれば、やる気のある先生だけにならないようにできるのかを、関係機関にも考えてもらいたい。こういう場に参加した教員が発表する機会をつくるとか、同じメンバーが参加するだけでなく、随行者を付けるとか、「代わりに行きなさい」となると、また一から始めなきゃならないので、いつものメンバープラスもう一人という機会があったりするといいのかなと思います。

僕らは、「防災教育をすれば、学力が上がる可能性がある」というのはわかっていますが、「学力上がるから防災教育しましょう」と言っても、やっていない人は、「防災教育で学力上がるのか？」というところで終わってしまう。僕らは付加価値を共有して、ここまでの議論ができるようになりましたが、ここにたどり着くまでの時間と場を他の先生に、どうやって供給してあげることがなかなか難しい。もっと防災教育がメジャーになったらいいし、防災教育科っていう科目ができたらいいなど、願っています。

森浦：新宮市の城南中学校の森浦です。皆さんのお話を聞いていて、新宮市で最近変化が出てきたことに気が付いたので、発表させていただきます。

城南中学校では、現在、防災の学習は限られた時間で、生徒に還元していかなければならな

い状況です。そのような中で、若い先生に「新宮市で災害ボランティアセンター設置訓練が開催されるんだけど、クラブの生徒を連れて行きませんか」と誘いました。すると、「行きたいです」と言ってくれて、30人ほどを連れて参加させてもらいました。その時にびっくりしたのが、新宮市にある3校の高校生も参加してくれていました。少しずつではありますが、片田先生・金井先生いろいろな方のお力添えで、小中学校で学んだ児童・生徒が、高校でも自主的に防災活動やボランティア活動をしてくれるようになってきたのだと思いました。

城南中学校は、5月の体育祭で応援合戦があって、観客や審査員の方に「私たちのクラスを優勝させてください」とアピールする場があります。1年生は、去年6年生で王子ヶ浜小学校の山本健一先生に担任してもらっていた生徒が発表する時に『熊本サプライズ』の替え歌を自分たちで作りました。その中で自分たちのクラスのことと同時に、熊本で被災された方たちに向けて、地震に負けないでという気持ちを込めて、最後に「頑張れ熊本」とアピールしてくれました。

自分たち新宮市のメンバーも何度も一緒に来させてもらっていて、いろいろなことが勉強になっています。隣にいる王子ヶ浜小学校の稲垣先生と、この前「夏休みに一度、小・中連携の防災訓練をしたいね」と話しました。そして、二人で避難経路を見て回って、「城南中学校はこの経路だけど、次やる時はこの経路の確認をさせたい」とか、地域の避難場所である近畿大学附属新宮高等学校・中学校に行って、スマホで標高を確認しました。僕たち二人もこの会で仲良くなって熱くなっています。管理職の先生方も凄く協力してくれるのですが、地元で初めての小中合同の避難訓練にあたっては、より多くの方を巻き込んでやらなきゃいけないことだし、小学生の安全確認をはじめいろいろあります。いい目的といい取組をもうひとひねりしてからやろうということで、相談しています。



森浦 展行 (新宮市立城南中学校)



大川 太 (尾鷲市立矢浜小学校)

大川：尾鷲市の矢浜小学校で去年から教頭をしています。先ほど、若い先生のことを小川先生が仰ってました。うちの学校は6学級64人しかいないんですけど、今年はそこに新採用が2人いるんです。大学出たてですので、防災の防災教育について話をする以前に、いろんなことがわけのわからないまま進んでしまっています。最近思うのは、朝学校に行くと、窓を開けないんですよ。職員室へ一番に来ても窓を開けないんです。それで僕が後から来て、全部開けてまわりました。ほかには、誰かが書類をとってたりしても、手伝いに行かないんですよ。感覚が違ふと感じました。誰かが何かしてた時にはすぐ手伝いに行つて、「これどう」とか、「大変だね」とか言うのが、僕らの年代の当たり前のことだった。教室に行ったら窓を開けるなんて、そんなことは当たり前だろうと。それで、先日、その先生に「教室の窓が開いてないので、子ども



に開けさせてくれ」と言ったんです。

先生が何もかもやってしまうと、子どもは何も考えなくなる。子どもが自分で考えて、「これやろう」、「あれやろう」という場面を教師が全部潰してしまって、そういうところを意識せずに毎日生活している。怖いなと思っています。

防災も人権教育でも、何もかもそうですけども、先生自身が自分で気が付いて動けるような教師集団であれば、子どもは自然といろんなことが身に付いてくるんじゃないかなと。だから先生方の話を聞いていて、帰ったらもう一回そのへんを見直しながら2学期を組み立てていこうかなと思っています。

金井：大川先生が、「最近の若い子は全然価値観が違う」と言っていました。僕らはそんなのの相手をずっとしてきていますよ。大人相手に防災の話をするときに、「小中学生はまだいい。学校でやってくれば、防災の学ぶ機会はある。でも、大人のあなたたちは、自分から真剣に学びに行かなければ防災なんか学べるわけない。だから、防災意識低くて当然なんですよ。」という話をしています。

僕ももう若手ではないので、今の若い子の価値観をこちらから学びにいかなくやいけないんです。自分の価値観を押し付けたてもうまういかないです。

新任の教員に対して、大学のカリキュラムに防災を入れていこうというのは凄いいいことだし、やっていくべきだと思うんですね。でも、今のままいったら、若い教員の阻害要因になるのは、今の現職の先生方なんです。どんなに新任の先生方が防災教育をやろうと思ったところで、赴任した学校の管理職の先生の一言で、やれていないという話はいろんなところから聞こえてくるわけです。そうすると、新任の先生だけじゃない。ここにいる先生方はいいんですけども、ここにいる先生方と同じ年代の他の先生方にどうやって学ぶ機会を与えるか。さっきほどの若い子の価値観を学ぼうとする姿勢と一緒に

で、防災に触れるきっかけの機会を与えないと、うまく回らないんだろうなと感じました。

もう一つ思ったのは、防災教育に興味を持たない先生がいることについては、そんなものかなって気がするんです。凄く失礼な言い方になるかもしれないんですけど、学校の先生は個性豊かですよ。部活動ばかり凄く熱心で、上手に指導する。その先生が異動してくるとその学校はいつも強くなって、大会で勝つ。生徒指導が凄く上手で、問題を解決する。いつも問題校ばかりを転々としている。それと一緒になんじゃないかなと思うんですね。防災が得意で、地域の人と実践するのが得意な先生がいる。それがここにいらっしゃる先生なんだと。

積極的にどんどん異動してもらって、いろんな壁にぶち当たって、辛い思いをしたら、同じ価値観を共有している、ここにきていただいて、課題も共有してもらおう。今現在、壁にぶつかっている先生もいらっしゃいますけど、逆転する機会は必ずきます。そのときに、またそこで活躍して頂ければと思っています。防災が得意な先生がこれだけいると考えた方がいいんじゃないかなと思っています。ネガティブなことばかり考えていてもしょうがないので、ポジティブな言葉のほうがいいかなというのは感じました。

ということで、第4回防災教育推進連絡協議会を終了したいと思います。どうもありがとうございました。